

五重唯識の解釈——貞慶撰『唯識論尋思鈔』を中心として——

後藤康夫

Interpretation of Wuchong weishi 五重唯識 (Five level of consciousness-only):
About Jōkei's *Yuishikiron jinshishō* 唯識論尋思鈔 (Compendium of Reflections
Upon the Treatise Establishing Conscious-only)

Yasuo Goto

The religious practice of “contemplating consciousness-only” was systematized in East Asian by the Chinese Weishi-school monk Ji 基 (632-832), who laid out the so-called five levels of consciousness-only (*wuchong weishi* 五重唯識) in “A Clarification of the Subtleties of the Scripture of the Heart of the Perfection of Wisdom” (*Borexinjing youzan* 般若心經幽贊) and the “Grove of Meanings of Consciousness-only” (*Weishi yilin* 唯識義林) chapter of *Essays on the Grove of Meanings of the Garden of the Dharma of the Great Vehicle* (*Dacheng fayuan yilin zhang* 大乘法苑義林章). As soon as these works had been transmitted to Japan, a series of commentaries espousing a variety of different interpretations began to be composed on both the *Dacheng fayuan yilin zhang* as a whole, and the *Weishi yilin* chapter in particular. These commentaries ultimately led to the emergence of a group of Kamakura-period texts focused solely on the five levels of consciousness-only, or even on just a single one of the five levels.

Among the works composed by the Hossō monk Jōkei 貞慶 (1155-1213), one of the most prominent Buddhist thinkers of the medieval period, during his years of seclusion at Kasagi Temple, the “Compendium of Reflections Upon the *Treatise Establishing Consciousness-only*” (*Yuishikiron jinshishō* 唯識論尋思鈔) emphasizes the central role played by the contemplation of emptiness (contemplation consciousness-only) in the attainment of insight into the ultimate truth (awakening). This was a new position that was not yet generally accepted at the time.

In his work, Jōkei proposes three theories as to which of the five levels of consciousness-only the contemplation of emptiness corresponds to: (1) “The discernment in which one banishes the unreal and preserves the real” (*kenkōzonjitsu* 遣虛存實, that is to say, the contemplation of emptiness that abandons clinging to the idea that various phenomena exist outside of the mind), (2) “The discernment in which one banishes the characteristics and realizes the nature” (*kensōshōshō* 遣相証性, i. e. the realization of the ultimate truth by means of the contemplation of emptiness that manifests once the myriad dharmas that arise due to causes and conditions cease to appear), (3) “The discernment in which one banishes the characteristics” (*kensō* 遣相, or the abandoning of the myriad dharmas that arise due to causes and conditions).

Among these, Jōkei adopted the second interpretation while acknowledging the existence of unresolved problems still awaiting resolution. This stance ultimately led later scholars to compose further works dedicated solely to the “discernment in which one banishes the characteristics and realizes the nature” (*kensōshōshō* 遣相証性) from among the five levels of consciousness only. The fact that Jōkei particularly emphasized the centrality of the contemplation of emptiness in his analysis of the five levels of consciousness only during his time at Kasagi, where he wrote his major works, meant that his position significantly influenced the further development of consciousness-only doctrine after his time.

五重唯識の解釈——貞慶撰『唯識論尋思鈔』を中心として——

後藤康夫

一 はじめに

仏教では、諸法を観察し自己の心にある対象に集中させ精神を静める等々の所謂「観法」の方法は多岐に亘るが、東アジアにおいて中国唯識学派では「唯識観」と呼ばれる方法が知られている。中でも、玄奘（六〇〇（二）～六六四）系統の唯識学派における実質上の初祖（慈恩宗）と見なされている慈恩大師基（六三二～六八二）が、自著の『般若心経幽贊』（『幽贊』）及び『大乘法苑義林章』（『義林章』）〔卷一「唯識義林」〕の二書において「五重唯識」を体系化していることに始まる。^②これ以後、東アジア地域では五重唯識による唯識観が定着してゆき、日本法相宗ではこの「唯識観」（五重唯識）が実践のための理論の一つとして位置付けられてきた。^③唐代以降、中国では唯識学派の目立った活動が見られなくなる一方、七～八世紀に唯識が相次いで伝来した日本では南都を中心として法相教学を考究しており、唯識観も同様に研究されてきた。奈良時代に記した該当箇所を含む著作は散逸している一方で、平安時代には『義林章』『唯識義林』の註釈書が作成されている。但し、現

存書は僅かに観理（八九五～九七四）や真興（九三四（五）～一〇〇四）の『唯識義私記』（前者「十五卷私記」・後者「六卷私記」）及び若干の逸文が残されているのみである。^⑤特に五重唯識に関しては諸伝諸釈が存在していたようで、『十五卷私記』には明福伝・善珠伝・平備伝が示され、『六卷私記』には善珠云・信叡云等が挙げられ、良遍（一一九四～一二五二）の『遣相証性』短釈には『古私記』（詳細不詳）の名で三釈等の多釈を記している。^⑥この「私記」とは平安時代の特徴的な著述形式（当該に関する先徳等の解釈を広く収載した上で自己の見解も記す解釈書）と言われるものである。^⑦鎌倉時代に到ると、唯識観のみの書籍として五重唯識乃至各重単独等々の書物が出てくるようになる。^⑧次代に影響を与えた鎌倉期を代表する南都の学侶の一人として解脱房貞慶（一一五五～一二二三）がおり、彼には唯識観に関して五重唯識の短釈（一論題一問一答形式の短編^⑨）が存在し、他書でも唯識観に触れていたりしている。貞慶著作の中で主要書としては笠置寺遁世時期の著作が該当し、唯識教義の諸論題について説いている論義書『唯識論尋思鈔』^⑩（「尋思通要」「尋思別要」）がある。この主要著作では唯識観（五重唯識）に関してどのような考え方を持っていたのであろうか、聊か明らかにしてみたい。これにより五重唯識展

開の一相を窺うことができるものである。なお、本稿では引用文について訓読文は省略する。刊本の場合は現代語訳のみを挙げ原文は註記に示す。写本の場合は原文と現代語訳を挙げることにする。

二 唯識観—唯識三性観・五重唯識

インド以来、唯識学では諸法のありようとして遍計所執性 (parikalpita-svabhāva) (「外界に実在すると」) 分別された性質・依他起性 (paratantra-svabhāva) (他〔因縁〕に依って生起された性質)・円成実性 (pariṣpanna-svabhāva) (「円満真実の」) 完成された性質) の三性を説く。これを中国では無著 [Asaṅga] (二一〇～三九〇頃) の『撰大乘論』(Mahāyāna-saṅgraha) 及び世親 [Yasubandhu] (三二〇～四〇〇頃)・無性 [Asvabhāva] (四五〇～五三〇頃) の『撰大乘論釈』(Mahāyānasamgraha-bhāṣya)¹¹ における蛇・繩・色香味触の四塵の譬喩で示してきたが、それを『義林章』により蛇・繩・色香味直して、暗闇に蛇(所執性)と見誤ったものは実は繩(依他性)に過ぎず、その繩もよくよく見ると麻(真实性)で扱ったものであったというように視覚化している¹²。円成を麻に喩えることへの厳密性には若干問題が残るもののこれ以後蛇・繩・麻の三性喩は広く用いられてきた。このように喩えられる三性を如何に観察するかで、唯識三性観が成立する。三性のうち遍計は妄情によって実在すると執着される虚妄法であるので理としては存在しない情有理無法、依円は識内の諸法並びに実性であるので妄情としては存在せず理¹³として存在する情有理無法と観察する。情有理無法を遠離し、理としては存在するもの妄情としては無である依円について依他は因縁生起の法・円成は眞実勝義

の法と観ずるのが三性観である。

もともと唯識を如何に観ずるのか、『幽賛』では

唯識の観を最も第一とする。……「唯」といふ言は所執の我法は心を離れて存在することを遮すためであり、「識」といふ言は因縁・法性は心を離れないことを表すためである。……「遍」計所執性は唯だ虚妄識、

依他起性は唯だ世俗識、円成実性は唯だ勝義識である。是の故に諸法は皆心を離れない。……今詳らかに聖教所説の唯識は無量種あるけれども五重を過ぎない¹⁴。(「語の補足等を記す。以下同様」)

と述べているように虚妄識・世俗識・勝義識の三性は唯識としての存在を明示して、これには五重(五段階)があるとして一々の重の説明に移り、更には後述して観の体に慧の心所を据えている。これを『義林章』では、唯識の「出体門」として所観と能観という言葉を示して観察する側と観察される側とを明らかにしている。即ち、遍計と依円を観じる唯識三性を如何に修ずるのか、五重唯識という具体的な方法として取り上げ、それを修するための能観側と所観側とを挙げ、これらを纏め上げている。『義林章』におけるこの操作が後々「五重唯識観」という言葉が出てくるように観法としての理論化と見なされていくことになる。

その能観の慧が五つの所観の境を観察していく道程で、所観としては第一重の遣虚存実識から捨滯留純識・撰末歸本識・隱劣顕勝識を経て第五重の遣相証性識までの五つの段階を修する方途を提示している。『義林章』「唯識義林」には能観について、

能観唯識は別境の慧を自体とする。……今は且く名称によるならば「能」観の体は慧である。無性が又言うには唯識「観」は現観智である、

又三摩呬多に由る、無顛倒智だからである。但、定中に起こす智を觀の体とするのである。「四」尋思等の勝れた唯識觀をおこなうのは必ず定「中」にいるからである。即ち止を觀の体と言わない。……別に頭らかにすれば、略して二位がある一つには因「位」、二つには果「位」、因「位」は三慧に通じる。唯だ有漏だからである。聞・思・修所成の慧を觀の体とする。明確に簡択することが性質であるからである。……果「位」は唯だ無漏のみである。修所成の慧を觀の体とする。正智と後所得智に通じて自体とするからである。……総合的に唯識と言えば能所觀に通じ、唯識觀と言えば唯だ能「觀」のみで所「觀」ではない。「何故なら」有無漏に通じ、散及び定に通じ、聞・思・修と加行・根本・後得の三智を自体とするからである。¹⁵

と述べている。唯識を觀じていく能觀とは基本的（散地）には別境の慧心所を本体とするが、禪定中には智を本体ともするのである、故に因位（資量位（修道位））においては三慧三智が能觀の体となってくるという。修行階位の各位では有漏無漏等心の作用が異なることから種々に説明されている。これが何を対象とするのかで、五重の対象の段階を説くこととなる。『義林章』では、これが所觀の対象としては有為無為の一切法となるけれども略して五重になるといい、以下のように五重を説いている。

一つには遣虚存實識。遍計所執は唯だ虚妄より起こり都て本体と作用は無いと觀じ、情有理無の故に正しく空であると排除する。依他と円成とは諸法の体相・実性であり、二智の境界であると觀じ、理有情無の故に正しく有（存在するもの）と「して」存（存在）する。……無始以来我法に執着して有とし、事理を撥して空とする。此の觀の中では「遣」とは

空觀により有執を破すことで、「存」とは有觀により空執を排することである。今、空と有とを觀じて有と空とを排除する。有と空とがもし無ければ亦空と有も無い。空と有とを相對させて觀「法」が成立する。純粹に有・空であれば何がいったい空・有であろうか。離言法性に証入しようとするれば、当然この方便によって入らなければならない。……要ず空と觀じて真実を証すると説くのは、要ず遍計所執の空を觀じて真実性に入ることである。……此の「唯識」の言は既に所執を遮す。もし諸識は「唯」のみであると執着するならば既にこれは所執であるとして除遣（排除）すべきである。此の最初門の所觀唯識は一切位に思量し修証するものである。¹⁶

と述べている。初重は、端的に言えば三性のうち遍計は情有理無の虚妄法であるから空じ、依円は理有情無で諸法の体・実であるから存することである。この虚妄法とは有空増益損減の遍計所執であるのでここで排している。ただ妄執は、有への執着と空への執着と捉えられるために各々空觀により有執を破す「遣虚」と有觀により空執を排す「存実」とに区別もされている。¹⁷初重によつて遍計が除遣され存されたのが依円であるもの一切位の因位において思量し見道以降に修証していくことになり、一切位の各々で存された依円のうち依他法が区別されていくことになる。これが第二重捨留純識から第四重隱劣顯勝識の段階である。外界を非存在であるとして遮した後には存在するものとして内なる識のみが認められ、依他である識には内境（相分）と心（見分・自証分・証自証分）とがある。これについて

二つには捨留純識。事・理は皆識を離れないと觀察するけれども、此の内識には認識対象（境）と認識主体（心）とがある。心が起こること

は必ず内境に託して生ずるからである。但、識にのみ「唯」と言い「唯境」とは言わない。『成唯識「論」』に「識は唯だ内のみあり境は外にも通じる、外と濫れんことをおそれるから唯だ識のみというのである……」と。「即ち」境には濫があることに由つて「これを」捨てて「唯」とは称しない。心体は既に純であるので「これを」留めて「唯識」と説く¹⁸。と、識内の相分は境のありようを示して外界にあるように執着されて濫れる恐れがあるためこれを捨てて心を留める段階、即ち濫れる境（依他の相分上に我法の遍計を帯する）を捨てて純なる心を留めることになる。この留められた心については本末に区分され

三つには攝末歸本識。心内の所取（認識されるもの）の境界は顯然とされている。内の能取（認識するもの）の心作用も亦同様である。此の見相分（認識する・される作用）は俱に識に依つて存在している。識自体の本を離れば、末の法は必ず存在しないからである。……相見の末を撰して識の本に帰着するからである¹⁹。

と、識内の心には識体である自証分と認識が生じる見分・相分（能取・所取）との本と末とがある。能変の自証分によつて所変の見相二分が変現するため、末なるものを撰めて本に帰着させ唯識を觀じる段階である。帰着させた自証分には心王・心所が存在する。これを

四つには隱劣顯勝識。心・心所は俱に変現するけれども、但だ「唯心」と説き「唯心所」と説かなのは、心王の体は勝れ、心所はそれに比べて劣っているからである。勝れたものに依つて生じているので、劣を隠して彰さない。唯だ勝法のみを顯わすものである。……心「王」の自体「分」が変現して見相の二「分」に似現する。「同様に」貪信等心所も変

現して「貪信等の」見相「分」に似て現れるけれども心「王」は勝れている故に心「王」は二「分」に似ると説く。心所は劣なので隠して説かない²⁰。と述べている。自証分には心王の自証分と心所の自証分とがあり、それぞれの因能変によつて自証分から見相二分が変現して各々において認識が生じるわけである。その中心となる働きをする心王と付随的働きをする心所とは後者を隠して顯われている前者を觀察する段階である。ここままで遍計を遣虚し存実した依他を捨留・撰末・隱顯して自らの心王まで対象を專注してきたわけである。この後、存実していた円成を加えた依円の關係性に入るのが第五重である。

五つには遣相證性識。「識」ということばには理（円成）事（依他）が存在することを表している。事法は相用（すがた・はたらき）であるので遮し、理法は性体（本性・本体）であるので覺りを求めるべきである。……『撰論頌』には「繩を蛇と思う。繩を見る時は蛇の思ひは無い。繩を証見する時は蛇の認識は誤つていたことを知る」と。此の所説は、繩覺を起す時に蛇覺を遮すことは依他を觀じて所執覺を遮すことに喩えている。繩を構成しているものを見て繩覺を遮すことは円成を見て依他覺を遮すことに喩えている。此の意味は次のことを顯している。所遣の二覺は依他起性で、染分を断じるためである。所執の実蛇実繩の我法とは当情ではない。依他に対し遮すると称しても互いに「遍計のように」除遣するものではない。蛇は妄「情」に由つて起さるので本体も作用も無い。繩は麻に拠つて生じるので仮の作用はある。麻を真理に譬え、繩を依他に喩える。繩と麻の本体と作用を知れば蛇情は自ずから滅する。蛇情が滅するから蛇情は当情とならず所執を遮す。……真觀（実証觀）を証す

る段階では真理を照して（根本智が真如理を証し）俗事が彰われる（後得智が依他を了す）。「根本・後得二智の認識対象である」理・事が彰われれば我法「の二執」は自然と滅してしまふのである。これが一重（一切位に亘る）所観の本体である。²¹

と述べている。存された心王（自証分）において事理があり、相用の事は依他で性体の理は円成であるので前者は遮し後者について唯識の理を觀じ証するのがこの重である。既述の蛇繩麻の譬喩の通り繩（依他）を見て蛇（遍計）の認識を排し麻（円成）を見て繩の認識を排していく段階である。所観の対象としての有為無為・有漏無漏の一切法から觀察対象は遍計を遣虚して依他の二法を相対させて順に絞り込んでゆき最終位では自己の心内において依他を相対して依他を遣相して円成（識実性としての真如無為）を証するのである。このようにして五つの段階の觀法を樹立している。このように基は五重唯識を説示している。

三 『尋思鈔』—成立と諸本

五重唯識に代表される唯識觀は、『義林章』『唯識義林』により能所觀を出体門とする中で体系的に提示されているが、善珠（七二三〜七九七）の『大乘苑義林章義鏡』（『義鏡』）以外現存する註釈書はなく、『義鏡』にも当該箇所は現存していない。僅かに平安時代の「唯識義林」註釈書として觀理（八九五〜九七四）・真興（九三四〜一〇〇四）の『唯識義私記』が現存しているのみである。鎌倉期、貞慶は教学上の先学として祖父師藏俊（一一〇四〜一一八〇）を導き手としてよく引文しており、彼以外に善珠・真興等も尊重

して、善珠・真興・藏俊たちが貞慶の唯識学・因明学の教学形成に少なからず影響を及ぼしている。

貞慶は応保二年（一一六二）八歳で南都下向後藏俊の室に入り、叔父覚憲（一一三二〜一二二二）の下でも学び始め、永万元年（一一六五）十一歳で出家授戒後、僧綱職をめざす僧侶人生を歩み始めている。寿永元年（一一八二）に維摩会堅義を受け得業となつたのを皮切りに、同二年より二年続けて法勝寺御八講問者、文治二年（一一八六）維摩会講師、同三年法勝寺御八講師、同五年最勝講講師・法成寺御八講堅義、建久元年（一一九〇）最勝講講師・法勝寺御八講講師等を勤めるなど着実に僧界での地歩を築いていたが、次第に世の無常を厭うあまり益々仏道実践に励む思いが強くなり、ついに無常を厭い栄達を志向しない等から笠置へ遁世したのが建久四年（一一九三）・永蛰居が同五年である²²。笠置では寿永元年に書写を發願した『大般若経』を収納した般若台にある草庵を中心として『講式』等を作成したり同朋たちと談義を行ったりしており、程なくして藏俊の論義書『菩提院抄』『変旧抄』を規範としながら貞慶自身の論義書を作成していくのが、建久八年からである。このあたりは、

去建久八年丁巳閏六月廿八日就唯識論聊企愚抄。本无徵功、隨又廢亡。漸送四年、无何緩怠。但同門良公常登臨之間、粗示予愚、悉令抄本書大意。即摩尼抄一部三十二卷。去冬之末今春之始五十日餘日、与両三人談卷々大事、馳筆記七十餘条了。自六月一日／至九月上旬首尾百日許、重繼先度余淺。其以就故上綱及舊抄等取略拾。亦始第二卷終第一卷。令□□卷於本文者別抄之。……于時建仁元年辛酉秋九月十一日、於笠置山般若臺／草菴記之。沙門積貞慶²³（本稿では句読点のみを付しておく、以

下同様)

去ること建久八年丁巳閏六月二十八日、『成』唯識論』について少々愚抄の作成を計画した。「しかし」少しの進展もなくそのままにして漸く四年を送ってしまった。「これには」どうして緩怠がなかるうか。但し同門の良算が常に「笠置まで」登って会いに来ている間に、ほぼわたしの考えを示し本書(愚抄)の大意を抄させた。「これが」『摩尼抄』一部三十二卷である。前の冬の末より今春の初めの五十余日間、二・三人と各巻の重要部分を談じて執筆し七十余条を記した。六月一日より九月上旬に至る百日ばかり、再び先に記した以外の残りの部分を継承している。それは故上綱(蔵俊)の『変旧抄』等について取略した。亦、第二巻より始めて第一巻で終わる。□□巻、本文に対して別に抄したものである。

……建仁元年辛酉秋九月十一日笠置山般若台草庵にてこれを記す。沙門 釈貞慶。

と『尋思鈔』巻一にある。もともと貞慶は笠置に入って四年程経た建久八年閏六月二十八日(一一九七年八月二三日)に『成唯識論』に関する論義をまとめた抄物を企てたが早くも四年が過ぎてしまった。ただその間にも覚憲門下同門の良算(一一九四―一二二七)が度々尋ねて来ていたので、かねてから暖めていた構想を話して彼に『摩尼抄』を作らせている。そして跋文を記す前年の冬(正治二年(一二〇〇)の末より今春(建仁元年(一二〇二)の初めまでの五十日程かけて二三人の弟子と『成唯識論』の重要な問題を談じて七十余条の抄物を作成した、という。更に残された論題にも検討を加えるべく同年六月一日より九月上旬までの百日かけて蔵俊の『変旧抄』を取略して抄物を作成している。そこで『尋思鈔』が完成したと考えられるのが跋文

を記した建仁元年九月十一日(一二〇一年一〇月九日)と見えよう。『尋思鈔』のうち前者は内表紙の書名下に「別」(例えば「論第一卷尋思鈔別」と付し、付していない後者と区別をして、後々に良算が引用等の際には『尋思別要』と称しており、室町期頃には後者を『尋思通要』と称して「別要」「通要」の区別がされている。なお、貞慶には『尋思鈔』作成のために予め良算に『摩尼抄』を作成させた以外に、資料集的意味合いを持ち必要引用文を集めた『成唯識論本文抄』(『本文抄』)も作成させたとする新たな見解も出て²⁴いる。この『摩尼抄』・『本文抄』と前後関係は不明であるが、『尋思鈔』作成を思い立ち作成までの間は、その準備として弟子達と教学談義を重ねていたと見られ、建久九年(同十年(一一九九))良算を筆記者とした談義書『般若臺談抄』を作成²⁵して、一部分が現存している。このように笠置遁世期に『尋思鈔』が作成され、五重唯識に関して言及しているわけである。著作年代は不詳なものと同じ笠置時期の他著書―初心者のための唯識教義を説く『法相宗初心略要』・唯識の心要を八門から説く『心要鈔』・簡便に一心を観察する方法を説く『勧誘同法記』―にも唯識観等に触れている。但し各々の撰述意図が異なっているため、五重唯識の短釈と違って註釈ではない。

正治二年から建仁元年にかけて作成された『尋思鈔』はその後書写を繰り返して諸本が形成されることになるが、広く紹介され出したのは古くはない。漸く戦前に『仏書解説大辞典』に橋本凝胤氏の記載で「法隆寺本・深草真福寺本」²⁶の名が出るものの、戦後に結城令聞氏の『唯識学典籍志』では「大谷大学・龍谷大学」²⁷の所在のみ記され、『国書総目録』²⁸及び国文学研究資料館『日本古典籍総合目録データベース』²⁹において大谷大学・龍谷大学等々が多数掲載されている。しかし、目録からは龍大本・大谷大本以外は何れも数帖

分しか存在しておらず、今日完本は確認されていない。ある程度巻数が揃って現存している写本には、龍谷大学所蔵の十五冊本（清兼本旧浄光寺蔵）・十二冊本（慧劍・遊林本）、大谷大学所蔵の十八冊本（清兼本）・九冊本（慧劍・教山・遊林本）・五冊本（慧劍・遊林本）、身延山大学所蔵の十八冊本（清兼本）である。このうち「別要」は龍大十五冊本・谷大十八冊本・身延山大十八冊本の三本、「通要」は龍大十二冊本・谷大九冊本五冊本の三本となる。これ以外に「別要」に仏教大学所蔵四冊本（三巻六巻八巻十巻）がある。存闕は仏大本以外の「別要」は何れも巻五・巻九が闕巻であり、「通要」は巻三・巻四・巻七・巻八・巻十が闕巻（部分的闕含む）となっている。また単巻のみ存在している書もあるため原本からどこかの書写段階で散逸や分散したものとと思われる。但、子細に見ると「別要」の中にも「通要」部分を含んでいたり、その逆もあるなどと考えられる箇所もあり各冊本は完全に区分けされているとは言い難く、書写段階で「通要」「別要」とが混同して同じ所に存在する等どこかで一緒になった可能性がある。今後『尋思鈔』全体の関係は別に考えなくてはいけないであろう。

各冊本にある「通要」と「別要」とは上記跋文の通り、先に作成されものが「別要」、その後で作成されたものが「通要」であり、暫定的であるが「別要」には問答形式の中に貞慶をさす「末云」が記され、「通要」には蔵俊をさす「本云」と貞慶の「末云」が記されている。また例えば「所縁行相段」と言うように「○○○段」と表題があるものは概ね「通要」であると見られている。更にこれとは別に『尋思鈔』と記される経論引用からなる問答形式の書も含まれている。なお、上記の各冊数本の中には「別」と記していても「通要」と思われたり、その逆であっても「別要」かも知れなかった

り、同冊内でも論題ごとに異なっているものもある。更にもう一言述べれば、龍大十五冊本・谷大十八冊本・身延山大十八冊本・仏大四冊本の「別要」は何れも明暦三年（一六五七）七月清兼擬講が別人物に書写させた写本の転写本であり、若干の字句の相違のみで内容は異ならず、転写本の姉妹本と考えられる。一方、谷大五冊本九冊本・龍大十二冊本の「通要」を見ると、その内表紙・奥書等から以下の通り複数の転写を経ている（転写奥書等を記すが、本奥書しかないものはそれを記す。合冊されている場合は各帖ごとに記す）³¹。

○大谷大学五冊本

- ① 第一巻（四帖之内第二）無し・第一巻（七帖之内第五）…弘安九年丙戌十一月二日書写畢／快嚴・第一巻（七帖之内第七）…于時建仁元年辛酉秋九月十一日於笠置般若／葦草菴記入沙門貞慶／建永二年四月十三日書写此卷愚意之趣偏同／上人之發願配法印權大僧都筆／弘安九年丙戌十一月十二日快嚴

- ② 第二巻（二帖之内第二）…弘安十年丁卯七月十八日書写之／執筆快嚴・第二巻（三帖之内第三）…無し

- ③ 第五巻（二帖之内第二）貞永元年壬辰五月十二日已尅許書畢／願以此功為當來世々見佛聞法之縁矣／法隆寺沙門澄筆／傳領信遍・第五巻（六帖之内第六）…無し・第六巻（三帖之内第一）…無し

- ④ 第九巻（四帖之内上）…二種姓段 延應元年己亥四月廿六日書寫／此偏佛法興隆修學不退也／願以此功德彌勒出生生空賢く／生年廿六歲如形注之畢／法隆寺西南院貞忠／于時應永十年癸未二月廿五日買得畢／阿弥陀院住／清祐、建長元年己酉卯月九日於法隆寺／西蘭院生年廿四歲之時書寫畢／法隆寺沙門尊心／改名隆印／実力、文化第十歲次癸酉初秋上澣六日從法隆寺大／經藏傳受眞本書写之积慧劍遊琳全写・第九巻二種姓段（建長元

年己／酉卯月日儲之／大經藏

- ⑤本ノマ、／尋思抄坎…無し・本ノマ、／尋思抄坎…弘安九年丙戌五月三日書寫畢／執筆快嚴、文化十癸酉年七月廿八日寫之此抄／恐應号尋思別要之書焉悉以越後州／德龍寮司之本寫之積遊琳

○大谷大学九冊本

- ①第一卷（四帖之内第二）…文化第十癸酉六月廿五日写功了釋慧劍・第一卷（七帖内第五）…文化第十癸酉六月二十日書寫功了／湖東玉緒山釋慧劍
- ②第一卷…維時文化十癸酉六月廿八日在平安偶舍写此一卷／畢积氏教山・第五卷（六帖之内第六）…文化十年癸酉六月廿一日於平安偶舍／此一卷拜写畢／沙門教山

- ③第一卷（七帖内第七）…建永二年四月十三日書寫此卷愚意之趣偏同／上人之發願而已法印權大僧都筆／弘安九年丙戌十一月十二日快嚴、文化十癸酉六月十八夜戌尅惡筆遊林・第二卷（三帖之内第三）…文化十歲次癸酉六月
- 中澣之一正午時／写此一卷曇／惡筆遊林

- ④第二卷（二帖内第二）…文化第十癸酉六月十七日写功了／釋慧劍
- ⑤第五卷（二帖内／第二）…文化歲次癸酉後夏中澣第五日正申時／写此一冊曇／秃筆遊林

- ⑥第六卷（三帖内第一）…維時文化十癸酉七月上旬第四日於平安偶舍／斯一卷写功訖／釋氏教山

- ⑦第九卷（四帖之内上）…文化十癸酉七月二日辰半尅書畢沙弥遊林

- ⑧第九卷（建長元年己酉卯月日儲之）…建長元年己酉卯月九日於法隆寺／西蘭院生年廿四歲之時書寫畢／法隆寺沙門改名釋印尊心、文化第十歲次癸酉初秋上澣六日從法隆寺大／經藏傳受眞本書寫之釋慧劍／遊林全寫

- ⑨本ノマ、／尋思抄坎…無し・本ノマ、／尋思抄坎…文化十癸酉七月廿三日辰時写此一冊／遊林、弘安九年丙戌五月三日書寫畢／執筆快嚴、文化十癸酉季七月廿八日寫之此抄／恐應号尋思別要之書／焉悉以越後州／德龍寮司之本寫之惡筆遊林

○龍谷大学十二冊本

- ①第一卷（四帖之内第二）…執筆政賀
- ②第一卷（七帖内第五）…弘安九年丙戌十一月十二日書寫畢／快嚴
- ③第一卷（七帖内第七）…弘安九年丙戌十一月十二日快嚴・第二卷（三帖之内第三）…弘安十年丁卯七月十八日書寫之／執筆快嚴

- ④〔第一卷〕…弘安九年丙戌五月三日書寫畢同日写功畢／執筆快嚴、維時文化十癸酉六月廿八日在平安偶舍写此一卷／积氏教山・第五卷（六帖之内第六）…無し
- ⑤第一卷…貞永元年壬辰五月十二日巳尅拜書畢／願以此功為當來世々見仏聞法之緣矣／法隆寺沙門澄筭／傳領信遍

- ⑥第二卷（二帖内第二）…文化第十癸酉六月十七日写功了／积慧劍
- ⑦第五卷（二帖内／第二）…文化歲次癸酉後夏中澣第五日正申時／写此一冊□／秃筆

- ⑧本ノマ、／尋思抄坎…法隆寺西南院貞忠
- ⑨第六卷（三帖内第一）…無し
- ⑩第九卷（四帖之内上）…延應元年己亥四月廿六日書畢／此偏為佛法興隆修學不退也／生年廿六歲如形注之畢／法隆寺西南院貞忠、于時應永十年癸未二月廿五日買得畢／阿弥陀院住清祐

- ⑪第九卷（建長元年己酉卯月日儲之）…無し
- ⑫第九卷…（本奥書）建長元年己酉卯月九日於法隆寺／西蘭院生年廿四歲

之時書寫畢／法隆同寺沙門尊心／改名隆表號印

となる。各冊それぞれに対応する本奥書及び転写年書写者が一致していることが分かる（一冊の中に複数ある書写年は帖を合冊している）。「通要」は文化十年（二八一三）慧劍・遊林・教山らが各場所て書写した書写原本の姉妹本となっている。但し、各冊本の転写経緯によって合冊内容には異なりがあるものもあり、その経緯は不詳である。「通要」「別要」現存写本は、何れも江戸時代の写本となる。少なくとも上記の大学所蔵本や上述目録から見る限り江戸期からの写本が急激に増加しているようである。

四 『尋思鈔』—五重唯識①

五重唯識に関わる『尋思鈔』は、上記『尋思鈔』のうちで卷一の論題「造論縁起」段に存し現時点で確認されているのは、龍大本十五冊本十二冊本・谷大本十八冊本九冊本五冊本・身延山大十八冊本の六本及び無為信寺蔵「論第一卷尋思鈔」一本が存し、字句の異同・空白のみで内容は何れも同じである。即ち「別要」卷一とされる書では明暦三年（一六五七）写清兼本の転写であり、「通要」卷一とされる書では弘安九年（二二八六）快嚴写（谷大五冊本）の本奥書を持つ本及び、文化十年（二八一三）慧劍写（谷大九冊本・同じく「弘安九年丙／戌十一月二日書写畢／快嚴」の本奥書）の転写本と政賀伝持（龍大十二冊本）の転写本と無為信寺本とである。

この「造論縁起」とは文字通り『成唯識論』の「造論の意義」を説き起す箇所、唯識教義の意義を説いているといえる。『成唯識論』卷一には

今、此の『論』を造ろうというのは二空に迷・謬ある者に対して正・解

を生じさせたためである。「理」解を生じさせることは二重障（煩惱障・所知障）を断ずるためである。我・法と執着することにより二障が生じる。もし二空を証すときにはあの障も断じる。障を断じるとは二勝果を得させるためである。「迷いの世での」いのちを継続させる煩惱障を断ずるに由り真解脱を証す。「正しい理」解を礙える所知障を断ずるに由り大菩提を得る。又、謬って我・法と執着して唯識に迷う者に対して開示して二空に達するためである。唯識の理は真実であると認知させるからである。復、唯識の理に迷謬する者がいる。或る者は「識」外の認識対象は識のように実在すると執着し、或る者は内識は認識対象のように実在しないと執着し、或る者は諸識は、作用は別々であるが本体は同じであると執着し、或る者は心「との関係性」を離れて他の心所は存在しないと執着する。これらの種々の異執を遮すためである。唯識の道理は真実の「正智による」理解を得させようとして、この『論』を作ったのである。³²

と「今」（二障を断じて二勝果を得る）・「又」（我法執による迷妄に対し二空に到達する）・「復」（実有実無等執着を破し唯識理を顕らかにする）の文字で始まる三つに分けて説かれている。これを基の『成唯識論述記』では、順々に正しい解を生じ障を断じ二果を得させる悟断得果（安慧釈）、二空に達し唯識性を悟らせる達空悟性（火弁釈）、諸々の邪執を破し唯識の理を顕らかにする破執顯理（護法釈）であると説明している。³³ 唯識学派で勝義とされている護法釈以外にもここでは否定される解釈ではなく、何れも唯識の意義の各面を示していると言える。即ち唯識における悟入とは右記ということを意味している。

これを貞慶は、『尋思鈔』「造論縁起」段において①「問—答—末云」、②

「問―末案（問答・問答）」、③「問―答―問―末云」、④「問」、⑤「問―本云―問―答」、⑥「問―答（空白多し）―問―本云―末云」、⑦「問（空白）―答―問―本云―別尋云―本云」、⑧「三智差別」（問答・問答・問）、⑨「彼師立八識牀一證」（論書抜粹）、⑩「可立八識牀一道理」（經論抜粹）、⑪「世親撰論諍」（問答・問答・問答）、⑫「問（空白）―答―問―本云―問―答―末云（末案別記之）」と記している。³⁴この中で「末云」が貞慶釈、「末案」が貞慶の私案と見られ、「本云」が藏俊釈である。貞慶自筆段階の形は不詳ではあるが、現行では「通要」的・「別要」的・「問答抄」的な三形を含んでおり、少なくとも転写段階では右記のような順番となっていたと見られる。このうち五重唯識について言及しているのは、前半部分の初めに位置する「末云」「末案」である。

貞慶は悟断得果であれ達空悟性であれ破執顕理であれ、最終的に仏果を得て唯識性を覚り唯識理を顕らかにするという唯識悟入のためには仏道修行の一つとして唯識観を修することも必要であると捉えている。一切位において遍計を遮し依因を存すると思量し修証する遣虚存実識の段階が増益損減の有空執を遮す具体的実践に附合すると見ている。しかも教学上明確化しておくべき問題点を認めている。殊に、この重では先述の通り有観が空執を破す「遣虚」と空観が有執を破す「存実」とが行われるわけであるが、直截有観でも真理を顕らかにすることができるのか否かが問題であった。唯識観では有と観じる有観と空と観じる空観とが相俟って観法が成立しているだけに『義林章』以来常に疑問視される問題であった。これについて法相宗としての常途となる「宗家の釈」は、当時までの一般的見解を纏めた良算の『成唯識論同学鈔』（『同学鈔』）に出ている。

問う。『本疏』（『述記』）の中で無漏の智品が証する真理に付いて且く有

観により真理を顕らかにするのか。答える。有観によっては理を顕らかにし得ない。その通りである。「これは」宗家の定めた所である。³⁵と言う通り、有観によつては真理は顕らかにできないというのがあくまでも法相宗家の定釈として認知されている解釈である、と。しかし、有空執と空有観との関係から言えば、

「問う」今これに付いて迷謬の種は同じではない。有と空の執見は分かれている。若し有という執着に対すれば、空観によつて理を顕らかにできる。「ところが」空という執着に対すればどうして有観によつて理を顕らかにしないのか。これによつて『撰大乘論』の中に「三性の観門を明らかにして遍計所執は存在せず依因の二性は存在すると観じる時、正しく真理を証する」（『撰大乘論釈』卷六 大正三一・三五三中取意等）と。どうして空有の観によつて俱に理を顕らかにしないことがあるか。³⁶という質問がでてくるのも当然の反応である。しかし、これに対して

答える。疑難はもつともである。有空執を破すには必ず空有観門による。能治と所治との「関係性」はその道理は必然である。『唯識義林』の「遣」とは空観により有執を破すことで、「存」とは有観により空執を排することである。今、空と有とを観じて有と空とを排除する」（大正四五・二五八下）とはこの意味である。但し、真理を顕らかにするのは空観に由る。真理は無相である。どうして有観によつて「観」門とすることがあるか。空を「観」門とする故に二空真如というのである。『唯識義林』の「要す空と観じて真実を証すると説くのは、要す遍計所執の空を観じて真実性に入ることである」（大正四五・二五八下）とは其の旨をさしている。此れは智と真如とは平等にして俱に能取・所取の

すがたを離れるから無所得の心にとどまり法性を証するからである。若し有観であればどうして無相の理を証することができようか。こういうわけで護法論主の『大乘』広百論「釈論」「卷六」の中で「有を有する有等は皆順心に順じる。空を空する空等は皆妄執に違う。故に智有る者は空を説く教説を聞き当然一切の有無等の執を離れ悟法の真理は非有非無であるという」(大正三〇・二一九下)ことを述べており、撲揚大師はこれらの意味によって「若し空病を破すならば有が除くことができる」と説き、若し理を顕らかにしようとするならば、要す空観を資とする『成唯識論演秘』卷一大正四三・八一六上)と解釈している。但し『撰大乘論』(『撰大乘論釈』卷六大正三一・三五三中取意等)における遣虚存実の観門の場合、真理を証する点は遮さない。「遣」虚「観存」実観において空を「観」門として真性に悟入するわけであるから「有空執を空有観で対治することと空観で真理を顕らかにすることは」相違しない³⁷⁾。と答えている。有空執に有空観が対応する点は『唯識義林』に「遣者空観。對破有執。存者有観。對遣空執。今觀空有而遣有空」と述べる通り、対治するされる能所関係にあることを説いてはいる。しかし、真理を顕らかにするには空観こそ適するわけであるとして『唯識義林』にも「謂要觀彼遍計所執空爲門故入於眞性」と記す通りであるとも言う。しかも護法『大乘広百論釈論』・智周『成唯識論演秘』からも空観によることを説いているとし、先問でも引かれた無性『撰大乘論釈』からは両者は相違しないと、言うことを示している。これらによって認識する智と認識される理とは能所のすがたを離れた所謂理智冥合であるからこそ無所得心として法性(唯識性)を証することができるというのである。能所治としての空有観と顕理のための空観とを

認めることは、当時唯識教学上、過失はないという認識であった。

この有観によつては、真理は顕らかにできないという良算の説く宗家の釈は何時ごろから語られてきたのであろうか。少なくとも有空観と空有執とは薬と病の関係に見立てることは既に真興の『唯識義私記』では説いていた。しかし、有空観と空観との並立については、真興は上述『唯識義林』二文の内の一文に対して「遣者空観對破有執等者明觀行之功能³⁸⁾」と言うように空有観は觀行のはたらきと措定しているが、もう一つの文は伏難(真観を証する段階は非有非空なのに何故『般若経』等には空を觀じて真理を証するのかという点に不都合があるという難を伏する)に対応する文章であると釈し、『同学鈔』のような解釈は取っていない。寧ろ「然觀遍計所執唯虚妄起乃至觀依他圓成諸法體實等者明觀行之方法也³⁹⁾」と言うように遍計を遣虚し依円を存実する『唯識義林』文章は觀行の方法であると説明して、觀行の方法と觀行のはたらきは遣虚と存実とが前後すれば問題であるが、一念における遣虚存実の觀なので相違しないと結んでいる。即ち、真興の平安時代中期にはまだ宗家釈としては定着していなかった蓋然性がある。今日、藏俊の唯識觀關係の書は存在していないが、宗家釈に平安時代後期の藏俊が関わっていた可能性は否定しないでおく。

五 『尋思鈔』—五重唯識²⁾

良算は貞慶の弟子となる前から『同学鈔』作成に着手していたが、弟子となった以降から貞慶没後まで引き続き作成しているため当該箇所が貞慶に師事する前後どちらなのか、『同学鈔』との関係も含めて合せて見ておきたい。

さて貞慶は五重唯識における空有観について、如何なる解釈を示したのか。

問依有観可顕眞理乎。答不尔。付之顕眞理／義由除障、而有観已除執、何不顕眞理乎。依之攝／大乘論中明三性観門観遍計空依圓有正／證眞理云。此豈非依有空観門同証理乎。⁴⁰⁾

①身延山本「爲」を龍大本・谷大本により「而」に改める。

問う。有観に依り眞理を顕すことができるのか。答える。そうではない。(問う)これについて眞理を顕す意味とは障を除くことである。有観は已に執を除く、どうして眞理を顕さないのか。これによって『撰大乘論』に「三性観門を明らかにして遍計は空であり依円は有であると観じ正しく眞理を証す」(『撰大乘論釈』卷六大三・三五三中取意)とある。此れがどうして有空観門に依って同じく理を証さないことがあるのか。

と言うように『同学鈔』と同じ問答構成である。貞慶はこのような問に対して、次のように答えている。

末云演秘依教破執修観顕理前後淺深相對／弁之。是以為執空之類可説依圓有聞之除空執所謂慈尊説五分論破衆生空見等也。雖說中道正猶以有破空也

信解中道之後自發三惠漸次修習之時將入理／之方便以空爲門所謂加行位尋思如実智等也。資粮中亦作三性空観不必単空行解空観／功能^④顯證眞理帶相有所得之観不能証理故／設其有可得中猶前後位相對漸進漸悟皆前／空観力也。為言。^①

①身延山本「有」を龍大本・谷大本により「習」に改める。②龍大十二冊本により「門」を加える。③龍大十二冊本により「不必単空行解空観」(谷大本は「以空観」)を加える。

なお「空観」のみは龍大十五冊本・谷大十八冊本。④龍大本・谷大本により踊り字を加える。⑤身延山本「可」を龍大十二冊本・谷大五冊本九冊本により「所」に改める。

末(貞慶)が云うには、『演秘』(大正四三・八一六上)中等取意)には教法に依り執を破し観を修して理を顕らかにするという。この前後の「観法の」淺深を相對して弁じるのである。以上のことから執空の類に対して依円の存在(存実観)を説くことができるわけである。聞くところには空執を除くということである。所謂、慈尊(弥勒菩薩)の「五分の論」(『瑜伽師地論』『分別瑜伽論』(未訳)『大乘莊嚴經論』『中辺分別論』『法性分別論』)には衆生の空見等を破すと述べている通りである。中道を説くけれども正しくは有を空により破す。中道を信解した後には自ずから「聞思修の」三慧を發して漸次に「唯識観を」修習する時には「真」理に入る方便として空を門とする。所謂、加行位における「四」尋思「四」如実智等である。設え資量「位」中にも亦三性「観」を作すといつても。空観とは必ず單空(空のみに偏っている空で中道空ではない)のみによる了解ではない。空観のはたらきにより眞理を顕証するものであり、すがたを浮かべ対象とするような有所得の観は「真」理を証することはできない。設え「言詮等の」中「道」を得ることがあつてもちようど前後の修行段階に相対して漸進漸悟するようなものである。皆、さきには空観力「によるわけ」である。

と述べている。貞慶は『演秘』の取意文を挙げて教証としている。これを踏まえ空執に対して依円の有を説くもので空執を除くことは弥勒の「五分の論」にも既に説示する通りであると言う。ただ、加行位において初地入見道するための尋思観・如実智観のように理(眞如を一部分だけ發得する)へ悟入していく手立ては空門であつて、空観のはたらきは眞理を顕証していくものであると、あくまでも空観の力が重要であることを強調している。『同学鈔』

で示した空有観と空観との並列と理智冥合による悟入は触れずに、まずは空観の優位性のみを認めている。だからこそ、次問で空観が五重唯識中の遣虚存実等なのか否かが新たな疑問として浮上してくることになる。ここは『同学鈔』では問答として挙がっておらず、しかも今の空観優位性までには言及していないことから『同学鈔』当該箇所の見解は、良算が貞慶に親しく教えを受ける前に記した箇所である可能性が惹起してくる。

それでは次に五重唯識において空観を説示しているのは、いったいどの重なかということ明らかにしなければならぬという教義上導かれる疑問が出てくる。これについては

問今所明空観者遣虚存実観欵。將遣相證／性欵。將外観欵。若初重観者加行位一実観可／當第五重相似理観引実證智故。若第五重者／既云證性圓成有観也豈以空顯理義乎。／是以章明遣虚存実説要観空方證眞者／謂要観彼遍計所執空爲門故入於眞性^④云。以／初観爲門旨明也若此外観者何行相哉^⑤。

①身延山本「識」を龍大本・谷大本により「外」に改める。②身延山本「可見起」を龍大本・谷大本により「一実観」に改める。③身延山本「観云」を龍大本・谷大本により「存実」に改める。④龍大本・谷大本により「計」を加える。⑤身延山本「理者」を龍大本・谷大本により「性^云」改める。⑥身延山本「非」を龍大本・谷大本により「明」に改める。問う。今明らかにする空観とは遣虚存実観か。それとも遣相証性か。それともそれ以外の観か。若し初重観であるといえ、加行位の一実観（如実智観）にあたり相似理観（淨分依他）による実証智を導く第五重に相当している。若し第五重であるといえ、既に「遣相証性の」証性は

円成の有観である。どうして空によって理を顕らかにするのであろうか。以上の理由から『義林』章には遣虚存実は「要ず空と観じて真実を証すると説くことは、要ず遍計所執の空を観じて真実性に入ることである」（大正四五・二五八下）と述べている通りである。初「重」観を門とすることは明らかである。若しこれ以外の観であれば、どのようなすがたであるのか。

と言うような問いを提示している。端的に空観は遍計・依円相對の遣虚存実^③観なのか、依・円相對の遣相証性なのか、それ以外の依他の捨留純・撰末帰本・隱劣顯勝なのか、何れに撰まるものであるかと言う疑問である。初重であれば、加行位において初地入見道するための如実智の一実観がまさに空観である。恰も第五重の相似理観に相当するとも述べている。初重こそが空観を説いている重であると言うのである。一方、もし第五重であれば遣相証性の証性が真如を証するものであるため、これが円成の有観であれば空観による顯理は述べられないはずであると、第五重の不適合さを示している。この疑問について貞慶が提示した私案がある。

末案有三義。一云初重也。正観遍計所執爲空是／三性観遣虚観解也。入於眞性者見道等也。空／爲門故明彼方便位加行位先空印所取^①。次／空印能取後並印二取空以空爲本是遣／所執之義也。但第五重者雖教相施設所指正當実／證義何以後爲方便乎。若凡位猶修／此観故者教所説也。癡詮談旨自初心信解之、豈／不説実證境界耶。遣虚遣相皆雖有淺深／除観解今以其至極相配位也。但以一実観／可引実證云事实可然。今遣虚存実者／則其観也。三性一念観故正所観者圓成傍所／知者依他也。所執相漸不現是遣虚存成滿義也。／二云第五重也。凡加行位雖観三性正引実／證是一

実観解也観^⑧心轉明勝境相像漸微者所／謂依圓成觀遣所執相之義也。忽心境乃／冥觀轉成无漏者即以彼方便遂契會眞／理之義也^⑨。若論顯理要資空觀者專當此觀^⑩。

①身延山本「所取印」を龍大本・谷大一八冊本により「印所取」に改める。②身延山本「雖只」を龍大十二冊本・谷大本により「施設」に改める。③身延山本「皆」を龍大十二冊本・谷大五冊本九冊本により「心」に改める。④身延山本「得」を龍大本・谷大五冊本九冊本により「説」に改める。⑤身延山本「別」を龍大十二冊本により「耶」に改める。

⑥身延山本「生」を龍大本・谷大本により「所」に改める。⑦龍大十二冊本により「滿義」を加え、更に谷大五冊本九冊本により「滿義」の後に「世」を加える。⑧龍大十二冊本・谷大五冊本九冊本により「是一実観解也觀」を加える。⑨龍大十五冊本・谷大本により「之」を加える。

末案（貞慶私案）には三つある。一つには初重である。正しく遍計所執を觀察して空とすることは三性觀の遣虚の観解である。『唯識義林』にある「眞性に入る」（大正四五・二五八下）とは、見道等の意味である。空を「觀」門とするため方便の位（段階）である加行位において先ず所取は空であると決定し次に能取は空であると決定し、その後二取は空であると決定する。「それ故」空を中心とする、これが所執を排するといふ意味である。但し、第五重では教相を設けるけれどもその指示するところは実証の義にあたるわけで、どうして第五重を方便といえようか。若し凡夫の段階（地前の段階）でも此の觀（空觀）を修するといえれば、教法に説く通りである。廢詮談旨（言葉によっては説き表せない）ということとは初めから信解している。どうして実証の境界（範圍）を説かないことがあろうか。遣虚と遣相とは二つとも浅深「の違い」があるけれども

「遍計や依他を」除く観解である。今「いえること」はそれは究極的な位置付けである。一実観は実証「の段階」にいたるといふ事が、実はその通りである。今、遣虚存実とは則ちそのような観である。三性一念観であるから正しく所觀とは円成であり、傍らに知られるものは依他である。所執の相は漸次に現われなくなる、これが遣存成滿の意味である。

二つには第五重である。加行位でも三性觀を行うけれども正しく実証にいたる、これは一実観解である。『唯識義林』にある「觀心が次第に次第に明勝となつて「妄情の」対象のすがたが漸く微れる」（大正四五・二六二上）いうことは、所謂円成觀によつて所執相を排する意味である。

「続いて『唯識義林』の」「忽ちに心と境とが冥し（現われなくなり）、觀ずること」「下品種子が中品に齊しくなる等の轉齊が行われてその品の本有」無漏が生じてくる」（大正四五・二六二上）とは、巧みなる手立てを用いて遂に眞理に契会するという意味である。「また『演秘』卷一にある」「若し理を顕らかにしようとするならば要す空觀を資とする」（大正四三・八一六上）とは、専らこのような觀法のことである。

と述べている。貞慶の私案に三案あると言ふものの、ここでは初重と第五重の二案を挙げてゐる。第一案とは遍計所執を虚妄として空にすることは三性觀——三性を遍計の遣虚觀と依圓の存実觀とに分ける——における遣虚觀にあるとし、その所執を排するとはちやうど菩薩修行階位の加行位において所取・能取そして二取という虚妄なる認識作用を空にすることを意味していると言ふ。但し、これであれば、恰も初重だけで事足りるように見られることを危ぶむのか、そうであれば第五重は単なる方便であろうかと言へば、全くそうではなく同様に実証を説いている、とみている。仮令地前の段階であつて

も遣相証性でも修していくと言う。それ故、遣虚と遣相とは浅深の違いがあるけれども各々執を除くといい、遣虚と遣相とは究極的な位置付けであるとしている。そう言うことは遣虚存実でも一実観によって実証を説くわけである。即ち初重と第五重との何れかでのみ空観によることは説かず、各々の重において各々修していくと提示していることを意味するであろう。これが第一案となる。なお、三性観には時間的前後はなく一念に觀察するものであるから遣虚存実でも三性のうち中心となる円成を所観とし傍らには依他を所知として所執を不現とすることも遣存であるとしている。初重であれ第五重であれ地前(資量位・加行位)地上(通達位・修習位)の一切位に亘って思量し修していくのが五重唯識であるから第五重でも加行位に修され初重でも地上で修されていくために何れの重でも空観によることは認められるという上で、初重の一実観は三性観として三性それぞれを上述のように捉えているという意味合いになろう。但円成所観・依他所知・所執不現と捉えている点は、遍計を虚として空じ依円を実として存する遣虚存実にあつて思量の段階の積と言えるのではないであろうか。これには更なる説明が必要な箇所である。

第二案は第五重である。加行位でも三性観によって実証智を証することは一実観解であると見て、『唯識義林』二文により円成観による所執の所遣と真理への契会である旨を述べているとし、『演秘』「若論顯理要資空観」文が第五重の空観を説いていると解釈している。これは第五重は円成による所執所遣と真理契会の肯定、その契会である真理への悟入は空観によることを説いていることになる。即ち、円成有観と空観とのはたらきの相違を述べていることになろうか。

このような案の段階であるからか、第五重案は長くはなくこの後には二問答を設けている^④。その意とする所は、初問では加行位は専ら所執と依他とを觀察し依他を仮有・所執を実無と観ずるもので二取を空であると決定するものであるが、『了義灯』には所執を観じるとしても三性観門は一念同時と説示している。そうであれば一実観による実証智を証することは加行位で行われることなのか、解釈に齟齬をきたすのではないかと疑問。次問では円成を観じる時に自ずから他二性も覚知することは実証位でも同様である。どうして加行位では三種類の対象を設けるのかという疑問。何れも加行位における唯識観の状況を問題としている。初重・第五重俱に加行位での修し方が説かれてきただけに加行位の問題を別問答として見なし得るが、ただ当初から問答を付していたか否かは不詳である。

まず、初答では一実観は加行位でも行われると明言している。通達位である真見道へ悟入する一実証智を起こすのは加行位(四善根・煖・頂・忍・世第一法)中の最終位である世第一法位においてであり、その場合依他を虚仮と観じ所執の二取を泯ぼす二空双印の義こそが三性同時観の意味であると述べている。加行位における空観説明の補足的問答の意味合いであろう。続く次答では三性道理は不一不異であつて観解は通局随時自在であるので単・復・自一兼二・自二兼一と区々になると述べている。但し、初行段階では修行上浅位であるため一性を観じつつ余性も観じるが、中間位へ進むと二三性を観じ、純熟究竟段階まで至ると専ら円成を観じるといふ。ここでは基本的に三性同時観であつても修行階位によって異なる点を述べて、広くは三性不一不異であると言うのである。しかしながら問答後には、

已上二義之中可存後義坎。問答難盡思而可知。^⑤

①龍大本・谷大九冊本十八冊本により「坎」を加える。

已上二義の中で後義を存するべきか、問答は尽くし難いという思いを知
るべきである。

と述べていて、後義を取るとしている。この二義とは貞慶私案の二案か或いは二問答かと言え、二案をさしその中の後者第五重を取ると考えるべきであらう。但、「問答難尽」とあるようにたとえ第五重であっても十分に意を尽くしているとは言いがたい。第五重には遣相そのものの意味であったり、淨分染分依他の遣不遣であったり、遍・依・円三性の「有」観に対応する相・生・勝義三無性の「空」観であったり等々、殊に第五重には「有」として存在する円成実性とそれによって立てる「空」としての勝義無性と言うように無自性空のあり方をしている三無性を説明する必要がある。これは空のあり方として依円上に所執を撥無する執空なのか或いは依円の法体に空を認める体空なのかという「執空伝・体空伝」や三性全体で中道を説く三性対望中道或いは一性に中道を説く「一法中道」等とも関わってくる問題でもある。即ち空観を重視するならばこそ、更に明らかにしておかなければならない点か幾つもあるということである。『尋思鈔』では、この後

三云付遣相證性名空觀是遣相義也。所遣相／者以依他爲本亦兼所執。然而不取依他所執之／邊於理觀直可論空觀義无相眞理无／相而存故以後二无性依円爲躰之義。可知其／義勢。今略之。^①

①龍大十五冊本のみ「三云」ではなく「一言」とある。

三つには遣相証性について空観というのは遣相義の箇所である。所遣の相は依他「起性」を根本として「遍計」所執も兼ねていて、依他「起性・遍計」所執は排して残さない。理観は直ちに空観を論じることがで

き、無相眞理の無相は存するために後二無性（生無性・勝義無性）は依円を本体とするのである。「但し」その文章の内容については今は省略する。

と述べている。先の問いでは初重・第五重以外であればどのような観なのかを尋ねていたのだが、右記の通り末案では第五重遣相証性の遣相部分を指摘している。所遣を遍計・依他として、依円の体は後二無性と捉えている。これはまさに上記で触れた体空伝をさしているように見られるが、詳細は略して説いていない。先の二義中の後義を取るべきかと記しながら第三案で遣相証性を提示することは、同じ第五重においても複数の説があったことを示唆している。しかし、もし龍大十五冊本のようにここを「一言」として「一言付遣相証性名空觀是遣相義也」とすれば第二案第五重にひとこと補足していることになる。抑も当初の問が空観は何重なのかであったので、第二案であれば第五重遣相証性全体を指すことを意味し、第三案であれば遣相証性の遣相のみを指すことになる。上述のように第二案及び二問答、更に後義を存すると記す点を加えて見てみると、ここを「一言」とみる第二案の補足とするには、改めて第五重と遣相とを齟齬なく説明する必要が出てこよう。何れに立つとしても少なくとも空観眞理として五重唯識中第五重遣相証性識を重視していると言える。

このような『尋思鈔』での問題提示は、先に少し触れた同じ笠置遁世期の他書に記されている唯識観とも少々異なる。初行者のために唯識教義を示すとされる『法相宗初心略要』では、五重唯識の中で初重に比重を置いて「そもそも諸法は一心を離れない。心外に別の法は無いからである。心外の諸法一切は都て無い。心内の諸法、其の事「法」は無いことはない。其の事「法」は則ち如幻の縁生である。実在の存在（実有）ではないけれども都て

無いことはない。如幻の色声香味触、如幻の八識「心」王「心」所等がこれである。このように虚仮の事「法」は必ず其の理は存在する。……事理相似は不即不離である。此の如幻生の事「法」は依他起性と名付け、其の縁生の真理は円成実性と名付ける⁴⁸と云うように如幻生の事(依他)と縁生の真理(円成)との事理相似不即不離を遣虚存実唯識と説いている。このように初重を如幻縁生事と縁生真理の事理相似不即不離と見なす点は、ここで存する依円は地前位の観を中心に据えていると見なせるし、縁生道理等を説く道理から真理へと記す『法相宗初心略要統編』『真理事』へ関連してくる論題である。一方、『心要鈔』には唯識教義の心要において一心の要は観心にあるとして、「観心門」では「心は所観である。即ち一切法であり、略して五重が有る。麁[なる諸法]より細[なる諸法]へ推し量つてゆくと遣虚[存実]・捨濫[留純]は粗ぼ前門を顕す。「これは」今は且く有為識の本末を観察するものである。真如の心用は遣相[証性]門であり、「これは」事・理[の法]の指帰する「意義を説いている」ものでこれで十分である⁴⁹と述べ、初重・第二重はあくまでも有為識の本末義を観じる前門に過ぎず、第五重こそ事理を指帰すると言うように五重唯識の枠組みの中の第五重の肝要な点を指摘している。また、ある老僧から唯識の観行を尋ねられて記したとされる『勸誘同法記』には観行の方法として「勸修門」「義相門」「修習門」「悟解門」「利他門」「略要門」を挙げ、「義相門」の中で「三虚実義」では遣虚存実・「四本末義」では撰末帰本・「五相性義」では事理に触れているが、本末義の中で「唯識観を修して如幻を悟る人は、空のように障害とならずに墻壁を通り抜けることができ、池のように妨げとならずに大地に入ることができ。方丈室内に三万床を容れ大小は「相互に」無礙となり自他を同じく見ら

れる⁵¹」と唯識観を修するならば無礙自在となるありさまも述べている。これらは一心を観じることを軸として五重唯識等の諸教義を整理し直して老僧へ提示する形を取っている。このように同時期、撰述意図を異にする書物において五重の提示方法には視点の差があるだけに、空觀力を強調し諸案を提示する主要著書『尋思鈔』『造論縁起』段での五重唯識には、更なる詳釈を必要としていたと言えよう。著作年代を特定できないものの貞慶には別に第五重遣相証性の短釈⁵²があり、説明しなければならぬ遣相証性の疑問点―事理不一不異における依他の位置・四重出体と五重唯識の関係等―を記している。このため短釈の方が『尋思鈔』より後に著したと考えてよいのかも知れない。他重短釈の詳細は不詳であるが、『尋思鈔』での私案が第五重を重視している点を勘案すれば、私案から短釈への繋がりは認めてよいのではないであろうか。それ故、本稿で扱った『尋思鈔』中の五重唯識は、貞慶の思索途上ということと述べて差し支えないであろう。

六 まとめ

貞慶は興福寺在任時期には唯識観(五重唯識)に関する著作を作成していないと見られ、自他のための仏道実践に邁進し出す建久四年(一一九三)笠置通世時期以降、撰述意図を異にした『法相宗初心略要』『心要鈔』『勸誘同法記』等の各書には散説している。その一方で、同時期の建久八年(一一九七)に企画して以降、良算への作成依頼による『摩尼抄』や弟子達と唯識談義を行って纏めた『般若臺談抄』及び正治二年(一一二〇)より建仁元年(一一二一)にかけて唯識教義を極めるべく藏俊の『変旧抄』を手本として

『尋思鈔』(「通要」・「別要」)を作成している。前二者は散逸等により唯識観(五重唯識)作成の有無は不明のままであり後一者のみ現存している。しかし、五重唯識における貞慶解釈は『尋思鈔』の段階では完結しておらず、『遣相証性』等短釈へと至る書物において示されていると言えよう。仏道を修するためには心を観察して所観対象のうち遍計所執性は妄執の故に捨て去らなければならず、病葉関係に相当させて空有の増益損減執に対する有空観により対治することと真理へ悟入するために空観によることが併置される解釈に對してそれを認めつつも、五重唯識を修するに地前・地上位を通して空観を中心に据える解釈を案出している。それ故、空観は遣虚存実なのか或いは遣相証性なのか、それとも遣相のみなのかという三案を示して、遣相証性を存する案をとっていると見られる。真理悟入のための最終段階である遣相証性だからこそ空観による悟入を説き得るが、解決すべき諸点がなお存在している。現在閲覧し得る短釈は遣相証性のみで、当該重の諸点が記されていると言える。『尋思鈔』の案が短釈へと引き継がれていると見られるが、少なくとも私案として提示された『尋思鈔』での解釈は、当時の一般的見解を纏めた『同学鈔』には掲載されておらず、必ずしも広く認知されていた見解ではなかったと考えられる。まさに貞慶にとつての教義解釈途上の一段階として位置付けられるものといっても過言はないであろう³³⁾。

註

(1) 中国唯識系統の学派には主に菩提流支・勒那摩提訳『十地経論』等を研究する地論学派(地論師・勒那摩提についた慧光が南道派、菩提流支についた道寵が北道派)、主に真谛訳『撰大乘論』『撰大乘論釈』等を研究する撰論学派(撰論

師)、主に玄奘訳『瑜伽師地論』『成唯識論』等を研究する唯識学派(新師・瑜伽師・唯識師)に大別されている。なお、中国唯識には吉村誠『中国唯識思想史研究—玄奘と唯識学派—』(大蔵出版、二〇一三年)がある。

(2) 『幽贊』(原本・貞応三年刊正智院蔵本、仁安二年写宝寿院蔵本対校)では『般若心経』本文を二十一段落に分けて註釈する中、第二の「経曰行深般若波羅蜜多時」(大正三三・五二四下)に対する註釈箇所(大正三三・五二六下〜五二七中)に登場している。遍計所執性・依他起性・円成実性の三性を観察していく中で、無明を離れ諸法実相に相即するには唯識観が第一であるとして五重唯識の説明がされている。これが五重唯識を所観として能観の慧が観察するとした上で所観の境として五重唯識(大正四五・二五八中〜二六〇上)が説かれるのが『義林章』(原本・平安朝時代春日版興福寺清兼所伝薬師寺蔵本、元禄十五年道空刻本・平安朝時代春日版法隆寺蔵本対校)「唯識義林」である。二書の著述年代は不詳であるが、五重唯識を見る限り唯識観として『義林章』の方が体系化されているとい得よう。

(3) 根本論書『成唯識論』を相性位・初中後・境行果の三科に区分して解釈する基の『成唯識論述記』(大正四三・二二七中)以来、唯識学派では三門により叙述する方法が取られている。これを観法にも着目して三門とする場合がある。なお、深浦正文氏の『唯識学研究』下巻(永田文昌堂、一九五四年・オンデマンド版大法輪閣、二〇一一年)では教義の網格として教相門・法相門・観心門の三門構成として唯識教義を叙述する方法を取っている。その観心門に第七部修道篇(第一章唯識の観法・第二章修道の機類・第三章断惑の方法・第四章修道の行位)を当てている。

(4) 僅かであるが、建長二年(一二五〇)作の良遍『唯識観作法』(『観念発心肝要集』所収)に引用している行賀『唯識僉義』逸文は唯識観実践方法を記す(北畠典生『観念発心肝要集』の研究)二六三〜二七〇頁、永田文昌堂、一九九四年)。

(5) 『義林章』『唯識義林』の註釈書として観理『唯識義私記』(嘉吉四年写東大寺所蔵)・真興『唯識義私記』(大正七一「原本・明暦四年刊薬師寺蔵本」・日蔵六三「明暦四年刊本古写本対校」・仏全三〇「永徳三年法隆寺蔵本」・興福寺等所蔵)が現存。

これには間中潤「真興の研究―唯識観における法相・密教一致思想の發揮」（『龍谷大学大学院研究紀要』第六集、一九八五年）、同「小嶋真興の唯識観」（北島典生『日本の仏教と文化』永田文昌堂、一九九〇年）、拙稿「観理の研究―五重唯識説の日本的展開―」（『龍谷大学大学院研究紀要』第七集、一九八六年）・同「観理の『唯識義私記』について」（『印度学仏教学研究』第三四卷第二号、一九八六年）。また観理『十五卷私記』前半部翻刻には、上田晃圓『日本上代における唯識の研究』（永田文昌堂、一九八五年）がある。私記逸文は『成唯識論本文抄』に著者不詳「唯識義十卷私記」・恩訓「唯識義私記」・千到「唯識義私記」（三卷私記）が残されている。

(6) 註(9) 参照。拙稿「良遍の五重唯識論義『遣相証性事』の特色」（『仏教文化』第一五号、二〇〇六年）

(7) 平安期の特徴的著述形式については結城令聞「日本の唯識研究史上における私記時代の設定について」（『印度学仏教学研究』第三三卷第二号、一九七五年）がある。

(8) 五重唯識では弁範の『唯識五重問答抄』（『五重略問答』）（日藏六四「妙顕寺興福寺古写本対校」）〔拙稿「弁範の『五重略問答』における初重唯識に関する一考察』（龍谷大学仏教学会編『唯識思想の研究』百華苑、一九八七年。『仏教学研究』第四三号、一九八七年）、第五重は貞慶・良遍短釈が薬師寺に現存（註(9)）貞慶の初重・第三重・第四重が無為信寺に現存。唯識観については良遍の『信願上人小章集』（日藏六四（唯識観用意・唯識観事・自行思惟・唯識空観・中道事・唯識般若不異義・不思議））・仏全三二（自行思惟・唯識空観・中道事・唯識般若不異義・不思議）〔法隆寺写本〕及び『観念発心肝要集』（東京大学史料編纂所本「天文二二年写」・大谷大学本「正保三年写」）・光胤『中道空観之事』（日藏六四「文久三年写薬師寺藏本」）等がある。

(9) 五重の内の第五重には拙稿「貞慶の五重唯識説の特色―『遣相証性』翻刻研究を中心として―」（『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第四四集、二〇〇五年）。

(10) 生涯を通して釈迦・弥勒・阿弥陀・観音の信仰（同時進行ではない）をもつ

た貞慶が、仏道を修する点に焦点を当てた研究に楠淳證『唯識論尋思鈔』の研究―仏道篇―（法蔵館、二〇一九年）がある。また『尋思鈔』研究の嚆矢に新倉和文「貞慶著『尋思鈔』と『尋思鈔別要』の成立をめぐる」（『仏教学研究』第三七号、一九八一年）がある。

(11) 『撰大乘論本』卷中（大正三一・一四三上）、『撰大乘論釈』卷六（大正三一・一三五一中）、『撰大乘論釈』卷六（大正三一・四一五中）

(12) 『義林章』卷一「唯識義林」（大正四五・二五九上）

(13) 理有情無の「理」は、円成は識実性として存在するが依他については染分依他と淨分依他とで常不常門と漏無漏門とに分類される。前者は依他は不常門となつて遠離され常門は円成となり、後者は円成・淨分依他は無漏門となり染分依他は漏門となつて遠離される。

(14) 故唯識観最爲第一。……唯言爲遮所執我法離心而有。識言爲表因緣法性皆不離心。計所執性唯虛勝妄識。依他起性唯世俗識。圓成實性唯勝義識。是故諸法皆不離心。……今詳聖教所說唯識。雖無量種不過五重。（大正三三・五二六下）

(15) 能觀唯識以別境慧而爲自體。……今且依名觀體唯慧。無性又云。唯識現觀智故。又云由三摩呬多無顛倒智。但擧定中所起之智以爲觀體。作尋思等勝唯識觀必居定故。不言即以止爲觀體。……若別顯者。略有二位。一因。二果。因通三慧。唯有漏故。以聞思修所成之慧而爲觀體。此唯明利簡擇之性。果唯無漏。修所成慧而爲觀體。通以正智後所得智爲自體故。……若總言唯識通能所觀。言唯識觀唯能非所。通有無漏。通散及定。以聞思修。加行根本後得三智而爲自體。（大正四五・二五九上）下）

(16) 一遣虛存實識。觀遍計所執唯虛妄起都無體用。應正遣空。情有理無故。觀依他圓成諸法體實。二智境界。應正存有。理有情無故。……由無始來執我法爲有。撥事理爲空。故此觀中。遣者空觀。對破有執。存者有觀。對遣空執。今觀空有而遣有空。有空若無。亦無空有。以彼空有相待觀成。純有純空誰之空有。故欲證入離言法性。皆須依此方便而入。……說要觀空方證眞者。謂要觀彼遍計所執空爲門故入於眞性。……此唯識言既遮所執。若執實有諸識可唯。既是所執亦應除遣。此

最初門所觀唯識。於一切位思量修證（大正四五・二五八中下）

(17) 有空觀による空有執を廢すことと遍計を排除し依因を存することを深浦正文氏は空有對遣伝・方規功能伝という呼び方で説明している（『唯識学研究』下巻五九六〜五九八）。

(18) 二捨濫留純識。雖觀事理皆不離識。然此內識有境有心。心起必託內境生故。但識言唯不言唯境。成唯識言。識唯內有境亦通外。恐濫外故但言唯識。……由境有濫捨不稱唯。心體既純留說唯識。（大正四五・二五八下）

(19) 三攝末歸本識。心內所取境界顯然。內能取心作用亦爾。此見相分俱依識有。離識自體本。末法必無故。……攝相見末歸識本故。（大正四五・二五八下〜二五九上）

(20) 四隱劣顯勝識。心及心所俱能變現。但說唯心非唯心所。心王體殊勝。心所劣依勝生。隱劣不彰唯顯勝法。……雖心自體能變似彼見相二現。而貪信等體亦各能變似自見相現。以心勝故說心似二。心所劣故隱而不說。（大正四五・二五九上）

(21) 五遣相證性識。識言所表具有理事。事為相用遣而不取。理為性體應求作證。……攝論頌言。於繩起蛇覺。見繩了義無。證見彼分時。知如蛇智亂。此中所說起繩覺時遣於蛇覺。喻觀依他遣所執覺。見繩衆分遣於繩覺。喻見圓成遣依他覺。此意即顯。所遣二覺皆依他起。斷此染故。所執實蛇實繩我法。不復當情。非於依他以稱遣故皆互除遣。蛇由妄起體用俱無。繩藉麻生非無假用。麻譬真理。繩喻依他。知繩麻之體用。蛇情自滅。蛇情滅故蛇不當情。名遣所執。……證真觀位照真理而俗事彰。理事既彰我法便息。（大正四五・二五九上）

(22) 『讚仏乗抄』第八（『大日本史料』第四編一二・二九四〜二九七）には、笠置に『大般若經』全卷書写（養和二年正月〜建久三年十一月）の終わる頃、其の年の春世界を通れ次の年の秋に永く蟄居するとあり、『大般若經』を納める般若台建立は同年八月に棟上げを終え、草庵（茅葺五間一面僧坊一字）を加えて完成したのは建久六年十一月とある。

(23) 『論第一卷尋思鈔』卷一（十二冊本第三冊）所収（龍谷大学図書館所蔵）、龍大十二冊本を底本とし谷大九冊本・五冊本を対校本とする。

(24) 楠淳證「聖寛房良算と『唯識論尋思鈔』——『摩尼抄』・『成唯識論本文抄』・『般若臺談抄』の成立をめぐる」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第三九集二〇〇〇年

(25) 「貪無漏緣」（興福寺所蔵）（『興福寺典籍文書目録』第二卷三八三（奈良国立文化研究所、一九九六年）、「撰在一刹那」（薬師寺所蔵）。楠前掲書（二〇一九年）参照。

(26) 『仏書解説大辞典』第六卷二七d〜二八a（大東出版社、再版一九六四年「初版一九三三年」）何れも未見。法隆寺本は「法隆寺」の奥書のある大谷大学本や龍谷大学本との関係は不明。なお『唯識論尋思鈔』としては文化一〇年写の大谷大学と高野山大学の蔵本がある（『仏解』第一二卷一〇七a）。

(27) 『唯識学典籍志』四五二下（大蔵出版、再版一九八五年「初版一九六二年」）大谷大学「余六一六六一」は五冊本、龍谷大学「研佛」は十五冊本をさす。

(28) ①大谷（明曆三写一八冊）（文化一〇写九冊）（法隆寺蔵本写五冊）、慶大（『成唯識論第九卷尋思抄』、曆仁二写一冊）、竜谷（一五卷一五冊）、高野山真別処（三類境、一冊）（『唯識論第四・七尋思鈔』、二冊）、東大寺（『尋思抄第十卷抄』、文安元專弘写一冊）、薬師寺（『尋思抄』、大正写一二冊）（『国書総目録』第四卷五〇四a〜b（岩波書店、一九六六年）

(29) 「成唯識論尋思鈔」として【写】大谷（明曆三写一八冊）（文化一〇写九冊）（法隆寺蔵本写五冊）、慶大（『成唯識論第九卷尋思抄』、曆仁二写一冊）、竜谷（一五卷一五冊）、高野山真別処（三類境、一冊）（『唯識論第四・七尋思鈔』、二冊）、東大寺（『尋思抄第十卷抄』、文安元專弘写一冊）、薬師寺（『尋思抄』、大正写一二冊）更に「論第二卷尋思抄」として「倭成図、古314/貫1-8A」とある。「法相問用抄／事智問斷尋思抄」として【写】東大寺（室町時代辨雅写）。「論第一尋思鈔」として【写】高野山持明院（明曆三写）と三箇所挙げている（国文学研究資料館 <https://base1.nijiac.jp/info/ib/meta/pub/CsvSearch.cgi>）

(30) 註記(28)(29)にある薬師寺所蔵の大正年間書写十二冊本は未見。故に書写原本は不詳。

- (31) 谷大本は大谷大学図書館HP及び原本閲覧による。龍大本は原本閲覧による。
- (32) 今造此論爲於二空有迷謬者生正解故。生解爲斷二重障故。由我法執二障具生。若證二空彼障隨斷。斷障爲得二勝果故。由斷續生煩惱障故證眞解脫。由斷礙解所知障故得大菩提。又爲開示謬執我法迷唯識者令達二空。於唯識理如實知故。復有迷謬唯識理者。或執外境如識非無。或執內識如境非有。或執諸識用別體同。或執離心無別心所。爲遮此等種種異執。令於唯識深妙理中得如實解故作斯論。『成唯識論』卷一（大正三一・一上）
- (33) 『成唯識論述記』卷一（大正四三・二三四下）（三三七中）
- (34) ①②は本稿で扱うため省略。③安慧は五識と煩惱障相応を認めるのか・五識に我執がないのに何故相応するのか。④慧沼は二障体を自性体から捉える円測釈を認めるのか。⑤二乗聖者は生空真如を証するのか・二乗聖者は真見道を証せないのか。⑥慧沼は金剛心菩薩をどう解釈するのか・演秘引用の同断一障義をどう解釈するのか。⑦等覚菩薩は何故皆覺りの所得を得るといふのか・菩薩は一切相智を得られるのか。⑧因位に智慧を修するのか・諸識は八識体一か六識体一か・識体一義なのか。⑨八識体一の教証提示。⑩阿頼耶識と転識とは水波の關係にあり八識は不一不異。⑪『成唯識論要集』の三釈を提示し、これに対し八識体一義の立場よりどのように会通するのか。『世親撰大乘論釈』に八識義以外疑問点がないのか等。『成唯識論要集』の二釈に相違がないのか。⑫世俗勝義二諦に有境無心義を立てるのか。『大乘法苑義林章補闕章』は世俗門は唯境義を立てるのか。
- (35) 問。本疏中。付明無漏智證眞理義。且依有觀。可云顯眞理耶。答。以有觀不顯理也。爾也宗家所定也。『成唯識論同学鈔』卷一七（大正六六・六五上）なお原本は元亨四年写薬師寺藏本、甲本は薬師寺藏古写本、乙本は大日本仏教全書本。
- (36) 今付（甲本により「今」をふす）之迷謬種不同。有空執見相分若對執有。以空觀可顯理。若望執空。何以有觀不證理耶。依之攝大乘論中。明三性觀門。觀遍計所執空。依圓二性有之時。正證眞理見此豈非依空有觀俱顯理耶。（大正六六・六五上）（中）
- (37) 答。誠如疑難。破有空執。必依空有觀門。能治所治。其理必然故。判遣（甲乙本により「遣」を「遣」に変更）者空觀。對破有執。存者有觀。對遣空執。今觀空有。而遣有空。卽此意也。但顯眞理。必由空觀。眞理無相。豈以有觀爲門耶。以空爲門故。云二空眞如。述謂要觀彼遍計所執空爲門故。入於眞性。深存其旨也。此卽（甲乙本により「則」を「卽」に変更）智與眞如。平等平等俱離能取所取相故。住無所得心。親證法性故。若有觀者。豈證無相理耶。是以護法論主廣百論中。有有有等。皆順執心。空空空等。皆違妄執。故有智者。聞說空言。應離一切有無等執。悟法眞理非有非無云。撲揚大師。依此等意。若破空病。說有能除。若論顯理。要資空觀釋給。但至攝大乘論者。自本遣虛存實觀門之時。不遮證眞理。虛實觀中。定空爲門故入於眞性。故無相違矣。『成唯識論同学鈔』卷一七（大正六六・六五中）
- (38) 『唯識義私記』卷一末（大正七一・三一一上）
- (39) 『唯識義私記』卷一末（大正七一・三一一上）
- (40) 『論第一卷尋思鈔別』（原題通り、以下省略）（身延山大学図書館所蔵）所収。
- (41) 『論第一卷尋思鈔別』所収。
- (42) 『論第一卷尋思鈔別』所収。
- (43) 「遣虛存實觀」のように「〇〇觀」と記すことは、現存文献では眞與『唯識義私記』卷一（大正七一・二九九上、三二一上、三二二上等）を嚆矢としている。
- (44) 『論第一卷尋思鈔別』所収。
- (45) 問。加行位專觀所執依他於名義自性差別觀假有實無假有是依他實无卽所執也。設雖觀円成正猶／印所取能取空其空者則遍計所執也。了／義燈中以下空成觀所執之義三性觀門爲一念／同時若尔唯觀一実引実証智者非此位行相／又乖解尺実義。／答。此義実幽邃輒雖施設但実証位正三心十／六心於加行位皆所信學也。親引眞見道／一実證智豈不世第一法乎。若於有爲直起／行解者非只方便根本不煩根始難名第一／法是以正所觀者一実眞理有漏境中廢／詮勝義加行道中无分別智也。自解依他虚／假假漸派所執二取呼之爲三性同時之觀指之／爲二空雙印義猶帶所執依他空有二相／當

于微細行解之前故也。雖欲顯異實証不／所觀正通二性坎。／問。觀円成之時自悟余二性義實証位亦同何於／加行爲三種境哉。燈家破西明其実分明。答。／三性道理不一不異觀解通局隨時自在。或／単、或重、或自一兼余二、或自二撰他一爲／主不成句々區分如撰論前後文判悟入／次位不同是猶一相說也。廓法師坎。可謂義門／可衆多以其大旨之推、初行淺位多以一性爲先／乃兼余觀中間自在雙觀二三純熟究竟之／時專可住円成一門。上忍世第一法寧不一／実不二之觀解哉。燈家破他師也。有自在／之惠解增減之密意學者所知未必決判。況／雖似円成論躰猶依他相分也。雖似廢詮談／実既所執相狀也。二相未遣猶當心前指之／爲所觀亦非无所以然而深探実義是真如一／門也。(『論第一卷尋思鈔別』所収)

①身延山本への「於名義自性差別觀假有実無假有是依他実无即所執」は谷大本により挿入する。②身延山本「假」を龍大本・谷大本により「輒」に改める。③身延山本「可」を龍大本・谷大本により「所」に改める。④身延山本「所見」を龍大本・谷大本により「一実」に改める。⑤身延山本「也」を龍大本・谷大五冊本九冊本により「之」に改める。⑥身延山本「通」を龍大本・谷大本により「道」に改める。⑦身延山本「道」を龍大本・谷大本により「通」に改める。⑧身延山本「尔」を龍大本・谷大本により「余」に改める。⑨身延山本「四」を龍大本・谷大本により「次」に改める。⑩龍大十二冊本・谷大五冊本九冊本により「可住円成一門」を加える。⑪龍大十五冊本・谷大本により「上忍世第一法寧不一」(谷大本「上」なし)を加える。⑫身延山本「実心不可之」を龍大十二冊本・谷大五冊本九冊本により「一実不二之」に改める。⑬龍大十二冊本・谷大五冊本九冊本により「師」を加える。

(46) 『論第一卷尋思鈔別』所収。

(47) 『論第一卷尋思鈔別』所収。

(48) 『法相宗初心略要』(日藏六三・三八九下)(原本・佐伯定胤藏本、応安七年写宝寿院藏本等対校)。初重の「夫諸法不離一心。心外无別法故。心外諸法一切都无也。心内諸法非无其事。其事則如幻縁生。雖非實有而非都无。如幻色聲香味觸、如幻八識王所等是也。如是虚假事必有其理哉。若无其理者由何有其事哉。若无其事者由何有其理哉。事理相似不即不離也。此如幻生事是名依他起性。其縁生之眞理是

名円成實性。今此依圓二性更非如愚夫之所計。愚夫執我法爲實有。心内二性更非實我實法。或撥無事理爲都无。心内二性更非都无故也。今此偏者偏空妄執前當情所現偏有相或偏空相、是爲心外諸法。即遍計所執也。唯是妄心思而都无其體。如是遣二偏所執存一心依圓。(日藏六三・三八九下)の中、下線部の遍計所執を偏空妄執における當情所現の偏有相偏空相と捉えている点に注意を要する。「偏妄執」であれば當情現の偏有偏空は理解しやすいが、「偏空妄執」であると空執における偏有偏空となってしまう。

(49) 『心要鈔』(大正七一・五六中)(原本・文化十二年刊大谷大学藏本、日藏本対校)

(50) 『勸誘同法記』(日藏六四・五下〜八上)(原本・惠空藏本、法隆寺藏古写本対校)、更に略要門では「金剛般若経」偈頌「過去心不可得現在心不可得未来心不可得」(日藏六四・一三下)を誦すことを修行の要門と見なすなど仏道実践の具体的様相の一端を示すまでになっている。

(51) 修唯識觀悟如幻人、能通牆壁如空不障、能入大地如池無妨。方丈室内容三萬床大小無礙自他同見。(『勸誘同法記』(日藏六四・七上))

(52) 註(9) 参照。

(53) 当該問題を含む藏俊の書が見出されないため貞慶案への藏俊の影響は不詳ではある。但、辨範(〜一二九五)『唯識五重問答抄』には「菩提院の詞」を抄録したとあり藏俊の解釈を反映している可能性は存すものの藏俊解釈を特定できず、現時点では明確化し得ない。但し、貞慶の短釈・辨範の書及び室町期の光胤(一二九六〜一四六八)『中道空觀之事』『遣相証性觀之事』にも五重唯識と四重出体との関係を述べる解釈があるため、この解釈は貞慶を創案とするかは別としても貞慶を含む法系では採用されていた解釈であろう。なお、諸書で触れている唯識觀については、改めて別の機会に譲りたい。

【附記】

『唯識論尋思鈔』について身延山大学図書館・龍谷大学図書館・大谷大学図書館へ心より感謝申し上げます。